

Some Japanese anti-war poems in English

- a thought at the time of the 65th anniversary of the end of WWII

Aug. 20, 2010

I.Nishida

=目次=

<はじめに>

1. 「お百度詣」(大塚楠緒子)
2. 柳原白蓮・短歌 4 首
3. 「君死に給うことなかれ」(与謝野晶子)
4. 鶴 彬・川柳 4 句

<付記>

「わたしが一番きれいだったとき」(茨木のり子)(亡き母に)

<はじめに>

今年 2010 年(平成 22 年)は、太平洋戦争の終戦 65 周年になる。もう半世紀以上たっている。私は 1943 年(昭和 18 年)生まれであるが、自分の人生を振り返ってみたときやはり戦争の影響を有形無形に受けていると思う。生まれた年の 1943 年(昭和 18 年)は太平洋戦争の真っ最中で、この頃より戦況は日本に不利となり、敗色が濃くなってきたのは史実である。親父は兵隊として北支(中国東北部)を転戦していたと聞いている。私自身は戦争当時の記憶は全くなく、物心ついたときは戦後の民主主義教育を受け育ってきた。今、自分の周囲には、カラーテレビ、冷蔵庫、エアコンなど便利な家電製品や車もあり生活に何不自由もない。パソコンを使えばインターネットで世界中の情報を瞬時にとることができ、まことに平和な時代に人生の大半を送っている。この幸せと平和は今亡き両親にとっては想像もできないと思う。

しかし、現在は平和な人生を送っているが、今、冷静に自分の経た過去を振り返ってみたとき、間違いなく戦争の影の影響を受けて今の自分が在ると思う。一世代上の両親は、直接に、まともに戦争に翻弄された人生であった。戦前、戦中時代の戦争の非情さ、不条理を身で体験し、さらに、敗戦後の未曾有の食糧難、インフレ、それにもまして、国家主義から民主主義への価値観の大転換した世の中を経験し、生き抜き、そして私を育ててくれた。

私自信は直接戦争の記憶はないが、地域サークルでお付き合いしている私よりほんの数年しか違わない先輩は、いまだ教育勅語をそらんじ、戦争中は、日本は神国で戦争に負けることは絶対にないと信じ、将来は必ず立派な兵隊になりお国に報いるのが当たり前、と考えていたと話される。戦中の学童疎開、戦後の、(戦前の軍国部分の記述を)黒塗りした教科書を実際に使われた経験もお持ちである。(中には、1945 年(昭和 20 年)3 月の東京大空襲にあわれた方やアメリカの艦載機・グラマン戦闘機の機銃掃射を実際にうけ、その時パイロットの顔がはっきり見えた、という記憶をお持ちの方もおられる。)

正直言って、自分は、何故、国は戦争をするのか、という根本的な問いに答えを見出していない。歴史始まって以来、宗教の違い、民族の違いなどで人々の間で戦いが起こったのはわかる。歴史が進み高度な文明をもった近代になっても「国益」を守るという理由で国家間の戦争が起きている。戦争になれば、勝った国が負けた国の富をとり、負けた国の国民は苦しい生活を送ることになる。これを理由に国の為政者は戦争に勝つためにあらゆる手段をとり、また、国民に対し自由の制限や色々な戦意高揚策を押し付けてくる。我が日本も、明治維新以降、西欧列強の植民地主義に対抗するため富国強兵を国策とし、維新以降のたった 70 数年の間に、日清、日露、日米戦争を行ってきた。そして、65 年前の 1945 年に 350 万人以上ともいわれる人命を失い、国土は壊滅的に破壊され、広島、長崎に原爆を投下されて初めて敗戦を経験した。

思うに、日本の場合、戦争遂行という名目で、明治以降の為政者は天皇を利用した「皇国」の名のもとで教育をはじめあらゆる手段を通じて国民を徹底的にマインドコントロールしてきた。

今日の平和な時代に生きているから言えるのだ、と言われるのは重々承知の上であるが、たった 65 年前に日本の国民はなぜそんな簡単に為政者にマインドコントロール、洗脳されたのかというのが私の「日本」に対する問いである。「日本は、皇祖皇宗以来万世一系の天皇の治める国だ」、「日本は神国である」、「天皇は現人神である」、「日本は絶対に戦争に負けない。いざというときは必ず神風が吹く」、「米英は鬼畜生だ。敵国語の英語を使うものは非国民だ」、「生きて虜囚の辱めを受けず、捕虜になるぐらいなら自決せよ。捕虜になれば子子孫孫末代までの汚名だ。」、「欲しがりません勝までは。贅沢は敵。前線の兵隊さんに申し訳ない」、「神風特攻隊で敵軍艦に体当たり攻撃せよ」、「空襲で火事になれば、ハタキではたいて火を消す」、「アメリカ軍が上陸してきたときは、竹槍で戦う」、「アメリカ兵が来たら、婦女子は辱めを受ける」。このような為政者の煽動にほとんどの国民はマインドコントロールされていた。

とはいえ、一部の人たちであるが、国家の意思に疑問を呈し、人間性の叫びをあげる人たちもいた。このようなことを思っていた時に、偶然、NHK「ものしり英語倶楽部」でアメリカ人の詩人、Arthur Binard を知り、彼の「日本の名詩、英語で踊る」の本を読んだ。

今年、自分の人生とほぼ同じ終戦 65 周年の年にあたり、今の「日本と戦争」の思いを残しておきたい。

1. 「お百度詣」 — 大塚楠緒子

ひとあし踏みて夫（つま）思ひ
ふたあし国を思へども
三足ふたたび夫おもふ
女心の咎（とが）ありや

朝日に匂ふ日の本の
国は世界に只（ただ）一つ
妻と呼ばれて契りてし
人も此世に只ひとり



かくて御国（みくに）と我夫（わがつま）と
いづれ重しととはれなば
ただ答へずに泣かんのみ
お百度詣（もうで） ああ咎ありや

Pacing the Path to the Shrine One hundred times

By Otsuka Kusuoko

First step, and I think of my husband at the front.
Second step, and I hope for our country's victory.
Third step, and again my thoughts are for him.
Oh the guilt in a wife's heart.....

There's only one Japan, this beautiful land
resplendent in the rising sun.
Yet there's only one man in this world with whom
I've exchanged vows, who calls me his wife.

And so if I'm asked which is more important,
our country's victory or my husband's life,
I'll look down in silence, my eyes full of tears.
Praying, pacing the path to this shrine,
I'm guilty one hundred times.

「お百度詣」は、有名な「君死に給うことなかれ」（与謝野晶子）が1904年(明治37年)「明星」に出された4ヵ月後の1905年(明治38年1月)「太陽」に発表された。
当時、欧米の列強各国は中国大陸への侵略にしのぎを削っており、このような国際関係の中で日本も中国大陸での権益確保のため大国ロシアと戦った。
大国ロシアと戦争を始めるわずか37年前、日本は、薩長など反幕府の諸大名による江戸幕府の倒幕をへて幕藩体制に終止符を打ち、“国家としての日本政府”を樹立したばかりであった(1868年)。
明治新政府は、欧米各国と伍すために、西欧文化・文明を積極的に取り入れ、富国強兵策をとりこの延長上で26年後の1894年(明治27年)に日清、そしてその10年後の、1904年(明治37年)には大国・ロシアと国家間の戦争を始めた。
明治の御維新で日本国が生まれたとしても、普通ならばわずか30数年ぐらいでは一般庶民には、「国民」意識、「愛国」という国家主義的な観念は浸透、定着しなかったと思う。逆に言えば、30数年前までは、日本人の伝統的儒教に基づく「忠孝」の精神は、自分の家の家長や地域の長老、

大きく言っても、領民として自分の住んでいる藩のお殿様（領主）への忠誠が強かったはずである。

しかし、明治新政府の（討幕を果たした長州、薩摩の）為政者たちは、一般庶民の意識をそれまでの藩の「領民」から日本「国民」に強引に転化させ、天皇を頂点とする国家への「忠孝」に昇華させていった。この目的を貫徹するための手段として、政府は、「軍人勅諭」（1882年（明治15年））や「教育勅語」（1890年（明治23年））を制定し、天皇に忠誠を誓う全体主義・軍国主義の国家体制に庶民をマインド・コントロール（洗脳）していった。

以上のような時代の圧力があつた中、大塚楠緒子は、生身の感情を持つ女性として日露戦争に出征している夫の無事をひたすらに願う「お百度詣」を発表した（1905年（明治38年1月）「太陽」）。

かくて御国（みくに）と我夫（わがつま）と
いづれ重しととはれなば
ただ答へずに泣かんのみ

は、国家のために命を捧げても「忠孝」を尽くせよという体制の圧力と、されど妻として戦地に出征した夫の無事をひたすらに祈る心の葛藤の吐露に打たれるものがある。

2. 短歌4首 — 柳原白蓮



はじめに、明治、大正、昭和の時代を燦烈に生きた柳原白蓮の人物像を簡単に振り返っておく。

白蓮は、1885年（明治18年）に生まれ、第二次大戦後の1967年（昭和42年）まで生きた。彼女は華族の血をひき、教養もあり大正三美人の一人といわれ、確かに、横向きの立ち姿の彼女のポートレート写真は美しい。

白蓮は、伯爵・柳原前光の妾腹に生まれたが、前光は彼女を柳原家に引き取り華族として養育した。

14歳のときに北小路子爵家の息子資武（すけたけ）と結婚し、15歳で男児を出産。しかし、夫・資武には精神状態に問題があったため子供を北小路家にのこし5年後に離婚した。

実家に戻った白蓮は、当時の社会習慣では『出戻り』女性であり世間からは冷たい目で見られた。

27歳のとき、九州の炭鉱王として知られる25歳も年上の伊藤伝右衛門と再婚した。

この結婚は、兄・柳原義光が貴族議員に出馬するため伊藤からの資金が必要であったこと、また、伊藤伝右衛門としても、名門の華族と親戚関係をもつことができることになり互いの思惑が一致した政略結婚でもあった。

九州に行った白蓮は、そこで、「赤銅（あかがね）御殿」と呼ばれる豪邸で生活し「筑紫の女王」

ともよばれ、名士を集めサロンも主催した。しかし、結婚生活そのものは、伊藤家の複雑な家族関係、夫・伝右衛門の女性関係もあり苦悩の結婚生活であった。そのような中で、彼女は佐々木信綱に師事し短歌の世界に入っていった。

九州時代に彼女は戯曲『指鬢外道（しまんげどう）』（1818年・大正7年雑誌「解放」）を著しこの作品の公演化がきっかけで「解放」の記者で左翼思想家の宮崎龍介と知り合い、その後、彼と結ばれ、長男・香織を宿した。

1921年（大正10年）夫・伝右衛門と上京した際、東京駅で姿をくらまし、宮崎龍介の許にはしつた。同年10月22日の大阪朝日新聞が「筑紫の女王、柳原白蓮女史失踪！」、「同棲十年の良人（おっと）を捨てて、情人の許へ走る」と大きく報じた。そして、同日の夕刊に白蓮の絶縁状、「私は金力を以つて女性の人格的尊厳を無視する貴方に永久の訣別を告げます。私は私の個性の自由と尊貴を護り且培ふ為めに貴方の許を離れます」が公開掲載され大センセーションを起こした。当時はまだ姦通罪があった時代で、白蓮は、社会的なバッシング、華族からの除籍、財産没収されたうえで伊藤伝右衛門と正式に離婚した。

華族の生活から一変し、一平民として幸せな生活をおくることになったが、夫・龍介が結核を患ったため彼女の文筆で生計を立てた。

そのような生活のさなか、宮崎との間にできた長男・香織が、終戦のたった4日前の1945年（昭和20年）8月11日に戦死した。

下記の短歌は、もし終戦があと4日早ければ戦死せず無事に戻ったであろう最愛の長男を思い詠んだ悲壮な母の叫びの歌である。

戦後、白蓮は、「慈母の会」を作り一途に平和運動に献身した。

1967年（昭和42年）2月22日、愛に生き、平和活動にまい進した白蓮は静かに息を引きとった。享年82歳。

幼くて母の乳房をまさぐりし

その手か軍旗捧げて征（ゆ）くは

Are those hands that, once so tiny, grasped mother's breast?

Now they hold up a battle flag.

英霊の生きて帰るがあると聞く

子の骨壺を振れば音がする

Mistaken Identity happens some war dead return alive

I shake my son's urn. It rattles.

写真（うつしゑ）を仏（ほとけ）となすにしのびんや

若やぎ匂うこの写真を

This photo doesn't belong on an altar. This face brimming with youth,
you call this *the deceased*!

たった四日いきていたらば死なざりし

いのちと思ふ四日のせつなさ

Killed four days before war ended.... if only
He'd lived four more. Oh the pain from just four days.

3. 「君死に給うことなかれ」 — 与謝野晶子

1904年(明治37年)、日露戦争に出征した弟の無事を祈った与謝野晶子の最も有名な詩である。Arthur Binard は、表題「君死に給うことなかれ」を、“Don't Lay Down Your Life”と英訳した。見事な訳と思う。

lay down は、“Lay down your arms, and surrender!”(「武器を置いて降伏せよ」)という定型表現で使われる。

もしこの句を逆説的に、“Lay down your life. Never surrender”(「降伏するぐらいなら、自決せよ」)のように変えると、まさに「生きて虜囚の辱めを受けず」という戦前の為政者が為したアジテーションを連想させる

明治の為政者は、日露戦争(1904年、明治37年)の始まる、たった37年の間に、庶民を徳川時代の藩の「領民」から天皇に命をささげてまでも忠孝を尽くす「国民」に見事にマインドコントロールした。そしてその手段に使われたのが戦陣訓「生きて虜囚の辱めを受けず」であった

。国家間の戦争のルールとして、「ジュネーブ協定」(1929年)があり、武器を捨て降伏し捕虜となった兵士は人道的に扱われることを定めている。しかし、明治以降一貫して昭和の太平洋戦争の終戦まで日本の為政者は国民に対し「生きて虜囚の辱めを受けず」という戦陣訓を国民の骨の髄までしみこませた。この呪縛のためにいかに多くの軍人、民間人が、玉砕、集団自決、神風特攻などで犠牲になったことか。今、我々は、キム・ジョンイルが支配する北朝鮮を人権のない専制社会主義国家と嗤うが、65年前の日本はまさに今の北朝鮮と同じ状態であったのである。

『君死にたまふことなかれ』

—旅順口包囲軍の中に在る弟を嘆きて—

ああをとうとよ、君を泣く、
君死にたまふことなかれ、
末に生まれし君なれば
親のなさはまさりしも、
親は刃(やいば)をにぎらせて
人を殺せとをしへしや、
人を殺して死ねやとて
二十四までをそだてしや。

堺の町のあきびとの

旧家をほこるあるじにて
親の名を継ぐ君なれば、
君死にたまふことなかれ、
旅順の城はほろぶとも、
ほろびずととも、何事ぞ、
君は知らじな、あきびとの
家のおきてに無かりけり。

君死にたまふことなかれ、
すめらみことは、戦いに
おほみづからは出でまさね、
かたみに人の血を流し、
獣の道に死ねよとは、
死ぬるを人のほまれとは、
大みこころの深ければ
もとよりいかで思（おぼ）されむ。

ああをとうとよ、戦いに
君死にたまふことなかれ、
すぎにし秋を父ぎみに
おくれたまへる母ぎみは、
なげきの中に、いたましく
わが子を召され、家を守（も）り、
安しと聞ける大御代（おおみよ）も
母のしら髪はまさりぬる。

暖簾のかげに伏して泣く
あえかにわかき新妻を、
君わするるや、思へるや、
十月も添はでわかれたる
少女（をとめ）ごころを思ひみよ、
この世ひとりの君ならで
ああまた誰をたのむべき、
君死にたまふことなかれ

Don't Lay Down Your Life

- To my younger brother, conscripted and sent to fight on the Liotung Peninsula, 1904 -

I cry for you, Brother,
don't you lay down your life.
You, the youngest child in our family,
thus cherished all the more --
Mother and Father didn't educate you
to wield weapons and to murder; they didn't
bring you up, to the age of twenty-four,
so that you could kill, or be killed yourself.

You are born into a long line
of proud tradespeople in the city of Sakai;
having inherited their good name,
don't you dare lay down your life.
What does it matter if that fortress
on the Liotung Peninsula falls or not?
It's nothing to you, a tradesman
with a tradition to uphold.

Don't you lay down your life.
The Emperor himself doesn't go
to fight at the front; others
spill out their blood there.
If His Majesty be indeed just
and magnanimous, surely he won't wish
his subjects to die like beasts,
nor would he call such barbarity "glory."

Little Brother, don't you dare
lay down your life in battle.
This autumn, Father passed away.
Mother manages, somehow, to carry on,
who's been taken from her --
People say ours is a prosperous age,
yet Mother's hair has all turned gray.

Inside the family shop, behind the curtain,
your willowy young wife weeps alone.
Have you forgotten her? Is she in your thoughts?
You two were together for less than ten months.

Think how her heart is wrung. There's only one
of you in this world, remember.
Your family has no one to turn to.
Don't lay down your life.

4. 川柳 4 句 — 鶴 彬

Arthur Binard の「日本の名詩、英語でおどる」で、鶴（つる）彬（あきら）という反戦の川柳作家をはじめて知った。

1909 年（明治 42 年）1 月石川県に生まれ、1938 年（昭和 13 年）9 月、29 歳の若さで当局に思想犯として拘束され獄死した。（小林多喜二も同じ 29 歳獄死）

鶴 彬の壮年期であった頃の日本は、満州事変（1931 年、昭和 6 年）がはじまり 1937 年（昭和 12 年）の日中戦争が泥沼化していった時代であった。

政府は、治安維持法の強化、国家総動員法などで戦時統制を強め、反体制の知識人や作家などを厳しく弾圧した。彼は、15 歳のころより川柳を始めたが 18 歳で大阪の工場で働いていた時分より反戦の川柳を詠み共産党にも入党した。1937 年、治安維持法違反で特高警察に拘束され、拘留中に赤痢にかかり 29 歳の若さで死んだ。

たった 29 歳の命であったが、次のような壮絶な反戦川柳をのこしている。

実際に戦地に出征され苦難を経験された方々にとっては、川柳ではあるが心に突き刺さるものがあるのではないだろうか。



「退けば飢えるばかりなり前へ出る」

To retreat now means we'll starve anyway
So it's "Forward! Charge!"

「屍のゐないニュース映画で勇ましい」

The men look brave on the newsreel with all corpses edited out.

「万歳とあげて行った手を大陸において来た」

When shipping out, those hands he raised in a "Banzai" — they stayed on the continent.

「手と足をもいだ丸太にしてかえし」

Once the limbs blown off they send off a log of a man.

<付記>

この年になって、亡き母への感謝ではないが……。冒頭に記したように私は、昭和18年(1943年)戦争の真っ最中に生まれ、その2年後に敗戦で戦争は終わった。終戦後しばらくは大変な食糧難だったそうである。うっすらと記憶しているが、母の背中に背負われて田舎のほうに行ったことがある。おそらく「買出し」であったのであろう。自分の着物かなにか大事なものを持って田舎の農家に行き、米と物々交換したと思う。それともう一つ記憶があるのは、夜、裸電球の下で黙々と縫物をしていた母の姿をおぼえている。

親父は、北支戦線で負傷し、家に帰ってきたのは私が小学1年生の時であった。戦後の未曾有の混乱期の中をまだ手のかかったであろう私をよくぞ無事に育ててくれた。うわつつらな言葉かもしれないが、平和な時であれば女として一番輝いた年代を、それこそ歯を食いしばり必死になって守ってくれたそんな母につきの詩を贈りたい。

わたしが一番きれいだったとき

茨木 のり子

わたしが一番きれいだったとき
街々はがらがら崩れていって
とんでもないところから
青空なんかが見えたりした

わたしが一番きれいだったとき
まわりの人達がたくさん死んだ
工場で 海で 名もない島で
わたしはおしゃれのきっかけを落としてしまった

わたしが一番きれいだったとき
だれもやさしい贈り物を捧げてはくれなかった
男たちは挙手の礼しか知らなくて
きれいな眼差しだけを残し皆発っていった

わたしが一番きれいだったとき
わたしの頭はからっぽで
わたしの心はかたくなで
手足ばかりが栗色に光った

わたしが一番きれいだったとき
わたしの国は戦争で負けた
そんな馬鹿なことってあるものか
ブラウスの腕をまくり

卑屈な町をのし歩いた

わたしが一番きれいだったとき
ラジオからはジャズが溢れた
禁煙を破ったときのようにくらくらしながら
わたしは異国の甘い音楽をむさぼった

わたしが一番きれいだったとき
わたしはとともふしあわせ
わたしはとともとんちんかん
わたしはめっぼうさびしかった

だから決めた できれば長生きすることに
年とってから凄く美しい絵を描いた
フランスのルオー爺さんのように
ね

=以上、2010年、終戦65年の夏=